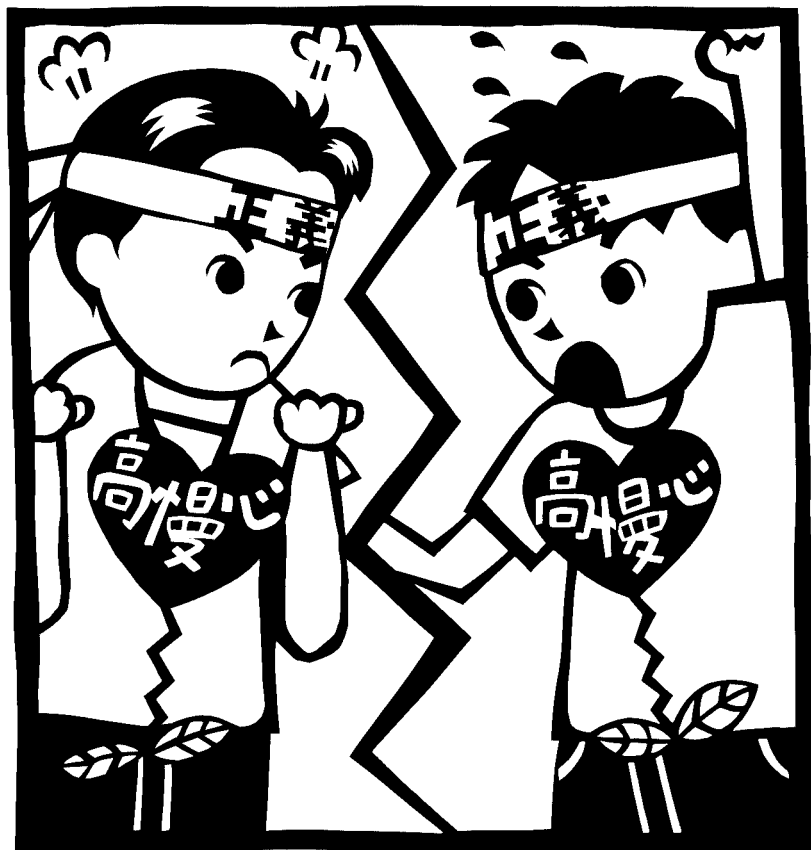


# 「正しいこと」にご用心



私たちは「正しいこと」「を言ったり、「正しいこと」を行おうとしているのに、いつの間にか周囲に不安を与えたり、疎まれたりしていることはありませんか。

「正しいこと」はよいことです。しかし、そのときの方法、そして心づかいによっては周囲に摩擦が生じることがあります。

今回は、身近な生活における「正しいこと」の大切さと落とし穴について考えてみましょう。

## 通路に 止められた 車



歳)の三人で、地元でも安いと評判のスーパーに車で買い物に行きました。いつもはスムーズに流れる道路も、心なしか混んでいるようです。目的地に近づくと、スーパーに向かう道路は渋滞です。幸司さん家族と同じように、買い物に来た人たちの車でごった返しています。

あまりの混雑に、駐車場の通路に停めている車もあります。幸司さんは、その中の一台の車に目が留まりました。通路わきには、「駐車はご遠慮ください」と書

ある日曜日、中田幸司さん(37歳)は妻の陽子さん(33歳)と娘の美紀ちゃん(6

かれた立て看板が立っています。

「おいおい、無神経だなあ。こんなところに停めたら迷惑になるじゃないか。ちゃんとマナーを守ってくれよな」

幸司さんは、そうつぶやきながら、駐車場に車を進ませました。

「お父さん、あそこ空いたよ！」

美紀ちゃんが指さす方向に、買い物物を終えた車が出ていくのが見えます。幸運にも、ちょうどスーパーの玄関口の近くです。

「本当だ、いい場所が空いたな」

幸司さんは車を止め、三人でスーパー



の中に入りました。ところが、買い物をしていても、幸司さんは先ほどの車が気になってしかたがありません。

「さっきの車、見たかい？」

「えっ、なんのこと？」と陽子さん。

「停めちゃいけないところに駐車していた車さ。あれじゃあ迷惑だよね」

「そうだったかしら。私は気がつかなかったけれど……。最近そういう車をよく見かけるわよ。この間なんか、どう見ても健康そうな家族連れが障害者用の駐車スペースに停めて、平然と買い物していたわよ。自分が車をできるなら、周りのことなんかお構いなしよね」

幸司さんはそれを聞いて、ますます語気が荒くなっています。

「最低限のルールやマナーぐらい守って



ほしいよな。今度見かけたら、僕が注意してやる！」

「それよりも、夕食は何にしようかしら。迷っちゃうわね」

陽子さんは、買い物のほうが気になっているようです。

# 正しくても 悪者に?!



買い物を終え、両手いっぱい袋を抱えて車に乗り込んだ幸司さん一家。

「さあ、帰ろう」と、車を出口へと進ませると、進行方向で数台の車が立ち往生しています。見ると、先ほどのマナー違反の車がまだ停まっついていて、通路を狭くしているせいで、なかなか車が通れないのです。

「ほら、見たことか。まったく、迷惑千万だっ！」

幸司さんは、通路に停めたドライバーの無神経さに、無性に腹が立ってきました。チツと舌を鳴らす幸司さんの心中を察した妻の陽子さんが、「あなた、あんまりイライラしないでね」と声をかけます。

結局、その場にいた人の誘導で、車は無事に通ることができ、幸司さんも通行することができました。イライラした気持ちのまま、車を走らせる幸司さん。普段は安全運転なのに、スーパーから出たあと、だんだんと運転が荒くなってきました。

幸司さんの運転に不安を覚えた陽子さんは、「落ち着いて」となだめますが、幸

司さんの耳には入りません。スピードも出すぎています。たまりかねた陽子さんは言いました。

「ちよつとあな  
た、いい加減  
にして！ あの  
車のせいで気分  
が悪いのは分か  
るけど、事故  
を起こしたら  
元も子もとこもない  
でしょ！ お願  
いだから、落ち  
着いてちょうだ  
い」



紀ちゃんも「お父さんの運転、怖い」と顔をこわばらせています。

「ごめんな。つ  
いイライラして  
しまつて……」

そう言うと、幸  
司さんは気を取り  
直して家まで車を  
走らせました。道  
中、落ち着いてき  
た幸司さんは思ひ  
ました。

「あれ？ いつの  
まにか僕が悪者わるものに  
なっているじやな  
いか。悪いのはあの車なのに……」

幸司さんは、陽子さんの言葉にハッと我に返りました。助手席に乗っていた美

# 「正しいこと」 もいいけれど



自宅に到着すると、幸司さんはあらためて陽子さんに謝りました。

「さつきはすまなかつた。無性に腹が立ってきてね。僕は昔から正義感が強すぎる場所があつて……」

「気にしないで……。でも、いくら正しくても子どもを怖がらせるなんて、いいこととは言えないわね。私も本当に怖

かつたんだから」

「俺、こういうこと、ときどきあるんだよね。会社でも、後輩を育てたいと思つて指導したとき、つい強く言いすぎてしまつたり……。〃自分は正しい〃つて思つていると、ついつい威勢がよくなつてしまうんだよね」

「その気持ちも分かるわ。でも、あの車の運転手にも何か事情があつたかもしれないし、負い目を感じているかもしれない」



いわよ。実はね、この前の夕方、ゴミ収集日以外にゴミを出している人がいて、

『今日はゴミの日じゃないですよ!』つて声をかけたら、『そんなの分かってます。

明日の朝は早くに出かけるんです!』つて言われちゃつて……。なんだか気まずくなつちやつたわ。確かに、ルールだから守ることが大切だけど、相手の事情や状況にも配慮してあげることも大切かなと思つたの。それに注意する言い方にも気をつけないと。私の言い方が悪くて、少し気分を害したのかもしれないわ。今度会ったら謝ろうと思つているの」

「そうか。陽子にもそんなことがあつたんだ……」

正義感の強い幸司さんは、少し考えこんでしまいました。

「ここは  
禁煙車  
だぞっ!」



数日後、幸司さんが仕事で地方出張に出かけたときのことです。

たばこ 煙草を吸わない幸司さんは、きんえんしゃ 特急列車の禁煙車に乗り、本に目を通していました。すると、どこからか煙草のにおいがしてきました。幸司さんの一つ前の席にいる人が喫煙きつえんしていたのです。

幸司さんは、こりゃいかな、禁煙な





のに〃と思い、注意しようと思った矢先、突然後ろのほうから、「おい！ここは禁煙車だぞっ！」という大きな声がありました。その鋭い声に、幸司さんは内心ドキッと驚きました。〃よくぞ言ってくれた〃という思いとともに、〃公衆の面前でそんなに怒鳴らなくてもいいだろう〃という思いもよぎりました。

煙草の煙は静かに消えていきました。とそのとき、前列の人が立ち上がり、怒鳴り声をした方向へと歩いて行くではありませんか。気になって見ていると、その人は怒鳴り声が上がった辺りに行つて、何やら話しかけています。話し声までは聞き取れませんが、怒鳴った相手を探しているようです。そして、どうやら相手が分かったようです。

車内にいる人は、誰もが〃喧嘩にな

る！〃と思いました。幸司さんも、そう感じながら、その人の動きを注視していました。相手の人も、予期せぬことだったのでしよう。中腰になつて、対峙しています、その顔は硬直しているように見えます。

すると、「〃注意をいただき、ありがとうございます。うございました。つい仕事に夢中になつてしまい、禁煙車であることをうっかり忘れていました。申し訳ありません」という声が、はつきりと聞こえてきました。その人は、そう言つて丁寧（ていねい）に頭を下げると、再び席に戻つてきました。怒鳴つた人も軽く頷いた（うなず）くように見えました。予想外の展開に拍子（ひょうし）抜けしたように、その人の後ろ姿をしばらく見つめていまし

た。

時間にして数分の出来事でした。幸司さんは再び本に目を落としましたが、今の光景が頭から離れません。

〃確かに禁煙車で煙草を吸つたことは、注意されても仕方がない。マナー違反（いはん）を注意しなければ社会はよくなつていかない。でも、注意する人もあんな大声で怒鳴る必要もないはずだ。いくら正しいとはいへ、自分の感情を相手にぶつけているだけのように思える……〃

怒鳴つた人に自分の姿を見たような幸司さんは、妻の陽子さんとの会話を思い出していました。

——正しくても、よいこととは限らない。相手の事情や状況にも配慮（はいりょ）して、注意の仕方にも気をつける——。



# 思いやりを添えて

私たちが円滑な社会生活を送るためには、最低限のマナーやルールを守るといふ「正しいこと」はきわめて大切なことです。また、法律違反や著しい不正に対しては、それなりの仕方に対処しなければ、社会の秩序が保てなくなります。

一方、家庭や職場、地域などの身近な生活の場では、いくら正しいことであっても、それを振りかざして相手や周囲を非難ばかりしては、決して良好な人間関係は築けないでしょう。お互いの正義感のぶつかり合いが、人間関係の亀裂や不和の原因となつていくことがたくさ

んあります。自分は正しいと思つていながらもかわらず、周りから疎んじられ、孤立するということがあれば、それは本当の意味で道徳の実行とはいえないのかもしれません。

では「正しいこと」が道徳、つまり「よいこと」になるには、どう考えたらよいのでしょうか。それは自分、相手、周囲にとつて良好な関係を築くための方法と心づかいに知恵を絞ることではないでしょうか。

私たちは人の不正はよく見えても、自分の間違いにはなかなか気づかないもの



です。知らず知らずのうちに相手や周囲に迷惑をかけていることがあるものです。自分が不正を指摘されたときのことを考えてみることも大切でしょう。

そうしたことを踏まえて、相手の立場や状況をよく見極めて、謙虚な思いやりの心づかいで対処していくことが、よりよい人間関係を築くうえで大切なことではないでしょうか。

『論語』に「徳は孤ならず必ず隣あり」（里仁第四）という言葉があります。これは「徳のある者は、孤立することがない。必ず共鳴する人が現れるものである」（『広辞苑』）という意味です。つまり、正しい道徳を実行している人の周りには、おのずと親しい仲間が集まってくるのです。

# 相手の立場に立つ

青森県八戸市に住む木村喜一さん（66

歳）は、三十七年間、暑い日も寒い日も休むことなく、地元の小・中学生の通学路で交通指導を続けています。毎朝午前七時から七時四十五分までの通勤ラッシュで車の通りが多くなる時間に、信号のない交差点に立って、子どもたちが安全に通学できるように尽力しています。

車が通るたびに的確に状況を判断しながら、誘導灯を使って華麗に車をさばき、子どもたちを安全に横断させていく木村さんはこう語ります。

「交通指導を始めた当時はピーツと笛を

鳴らして車を止めたんですが、今は吹かないんです。自分が笛を吹かれたならビックリしますし、先を急いでいるならイライラもするでしょう。無理に止めたらドライバーは気があせって、他の場所で事故を起こしてしまうかもしれない。そのことに気づいてからは、まず車を通してから、次に子どもたちを渡すんですよ」

子どもたちを安全に渡すという自分の役割（正義）を貫き通すだけなら、交通ルールのうえからも、車を止めることが正しいでしょう。しかし、木村さんは自

分の正義を行うだけではなく、職場への道を急ぐドライバーの立場に立つて、その心理状態などにも配慮して、車をスムーズに交差点を通過させ、その後子どもたちを渡すという思いやりを添えた交通指導を心がけています。

そのように毎日笑顔でドライバーに接する木村さんの対応に、ドライバーにも変化が現れました。木村さんの姿を確認すると、自然と停車するドライバー、「待たせてすみません」と頭を下げる木村さんに「お互い様ですから」とお辞儀で返してくれるドライバーが増えてきているそうです。

「危ない交差点だったはずが、いつの間にか笑顔があふれる交差点になってきました。花咲か爺さんのように、ドライ

バーにも子どもたちにも、笑顔の花を咲かせたいんです」と木村さん。

現在、木村さんが交通指導を務める地域では、八年以上死亡事故ゼロを継続しています。木村さんは語ります。

「ドライバーの皆さんが、歩行者や他のドライバーを自分の家族のように思いやれば、事故はきつとなくなるはずです」

\*

「正しいこと」も、木村さんのように、相手を自分や身近な人に置き換えて考えてみれば、思いやりの心が自然とわいてくるのではないのでしょうか。

ルールを守らない子どもがわが子だったら……、わがままを言うお年寄りが自分の祖父母だったら……、もし自分が相手の立場だったら……。そう考えれば、

正しいことを相手に伝えるときにも、思いやりの心を添えて行動できるのではないのでしょうか。

どんなときにも思いやりの心を添えて行動できる人こそ、誰からも親しまれ、

よりよい人間関係をつくることができる人だと言えるでしょう。

私たち一人ひとりも、そうした春風のように温かな人柄をつくっていききたいものです。

